

## 降臨節前主日特定 29 (11月26日の聖書箇所)

### I 第一朗読 (エゼキエル 34章 11-17節)

11 まことに、主なる神はこう言われる。見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする。

12 牧者が、自分の羊がちりぢりになっているときに、その群れを探すように、わたしは自分の羊を探す。わたしは雲と密雲の日に散らされた群れを、すべての場所から救い出す。13 わたしは彼らを諸国の民の中から連れ出し、諸国から集めて彼らの土地に導く。わたしはイスラエルの山々、谷間、また居住地で彼らを養う。14 わたしは良い牧草地で彼らを養う。イスラエルの高い山々は彼らの牧場となる。彼らはイスラエルの山々で憩い、良い牧場と肥沃な牧草地で養われる。15 わたしがわたしの群れを養い、憩わせる、と主なる神は言われる。16 わたしは失われたものを尋ね求め、追われたものを連れ戻し、傷ついたものを包み、弱ったものを強くする。しかし、肥えたものと強いものを滅ぼす。わたしは公平をもって彼らを養う。

17 お前たち、わたしの群れよ。主なる神はこう言われる。わたしは羊と羊、雄羊と雄山羊との間を裁く。

### II 第二朗読 (コリントの信徒への手紙 I の 15章 20-28節)

20 しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。21 死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。22 つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。23 ただ、一人一人にそれぞれ順序があります。最初にキリスト、次いで、キリストが来られるときに、キリストに属している人たち、24 次いで、世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます。25 キリストはすべての敵を御自分の足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。26 最後の敵として、死が滅ぼされます。27 「神は、すべてをその足の下に服従させた」からです。すべてが服従させられたと言われるとき、すべてをキリストに服従させた方自身が、それに含まれていないことは、明らかです。28 すべてが御子に服従するとき、御子自身も、すべてをご自分に服従させてくださった方に服従されます。神がすべてにおいてすべてとなられるためです。

#### 言葉の解説

20節 ■ 「復活し(ました)」。完了形の神的受動態であり、「神はキリストを復活させ、キリストは復活のいのちを生きている」の意味。

21節 ■ 「死が一人の人によって…死者の復活も一人の人によって」。22節で明示されるが、ここではアダムもキリストも「人」と表現される。アダムは単に人類の祖先ではなく、彼によって死がすべての人に及ぶことになる「最初の人」である。同じ考え方がキリストにも適用されるが、キリストは復活のいのちを与える「初穂」である。ちなみに、ヘブライ語では「アダム」も「人」も同じ語。

22節 ■ 「アダムによって…キリストによって」。直訳は「アダムの中に…キリストの中に」。「キリストの中に(エン クリストー)」はパウロ神学の重要な概念であり、これに合わせて「アダムの中に」とパウロは述べたのかもしれない。実際、ユダヤ教思想では、人類全体が「最初の人」アダムに含まれるから、死はアダムに由来するという考えがある。

25節 ■ 「すべての敵を…置くまで」。詩一〇一からの引用。この句を引用する目的は、キリストによる支配の時間的な限界を示すことではなく、その支配が神によって保証されているから必ず目標に到達するという事実を示すことにある。

26節 ■ 「死」。聖書の述べる死は人間存在全体の滅びであり、これを神が最後の敵として克服する。

28節 ■ 「神がすべてにおいてすべてとなられる」。神みずから再びすべてを統治することを意味する。キリストの高挙と共に敵の無力化と服従は始まっている。神はすべてをキリストに服従させた後、キリストからその支配を受け取る。

Ⅲ福音 (マタイ25章31-46節)

31 「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。 32 そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、33 羊を右に、山羊を左に置く。 34 そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。 35 お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、 36 裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』 37 すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。 38 いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。 39 いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』 40 そこで、王は答える。『はつきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

41 それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。 42 お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渴いたときに飲ませず、 43 旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。』 44 すると、彼らも答える。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渴いたり、旅をしたり、裸であったり、病気があったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったでしょうか。』 45 そこで、王は答える。『はつきり言うておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』 46 こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。』

語句の解説

■ 31節「人の子は、栄光に輝いて」。直訳「人の子が彼の栄光のうちに」。マタ二六27では「父の栄光に輝いて」、マタ二四30では「大いなる力と栄光を帯びて」となっている。31節の「彼の栄光のうちに」(直訳)とあり、節の結びには「彼の栄光の座の上に」(直訳)と繰り返され、人の子の栄光が強調されている。マタ二四29-31でも人の子の到来を述べているが、ここでは天に起こるしるしと天使の派遣に重点が置かれていた。しかしここでは、人の子自身に焦点が置かれ、31節から34節にかけて、人の子の行動が「来て、座り、分け、立たせ、言う」と描写される。▼「天使たち」。「わが神なる主は、聖なる御使いたちと共に、あなたのもとに来られる」と述べるゼカ一四5や、ダ二七13、一二2など黙示思想との関連が考えられる。しかし、ここでの天使は、これらの黙示思想に登場する天使とは異なり、裁きを執行する者ではなく、王として玉座にすわる人の子に仕える者である。

■ 32節「すべての国の民が…集められる」。直訳「すべての民が…集められるだろう」。すべての民を集める者が誰なのかあいまいである。動詞は「集められるだろう」というように受動態だが、この受動態については次のような解釈が可能。

① 神が隠れた行為者であることを示す受動態(神的受動態)であれば、「神によって集められる」の意味であり、神が行為者になる。

② 再帰的な用法としての受動態であれば、単純に「彼らが集まる」の意味になる。

しかし、誰が行為者であるかを明示しないのは、万民が集まるといふ途方もない出来事は人の目をも引くような出来事としてではなく、ひっそりと、ごく自然に起こる出来事であるということを印象づけるためかも知れない。マタイは福音書の結びでも「すべての民」について触れ、「すべての民をわたしの弟子にしなさい」と命じるイエスの言葉を書き留めている(二八19)。今週の福音での「すべての民」が誰を指すかは、さまざまな解釈があるが、終末の日に起こる人の子の到来とその裁きを述べる文脈から考えると、

ユダヤ人も異邦人も含む、弟子の宣教を聞いたすべての人々を指していると考えられる。▼「彼らをより分け」。直訳「彼は彼らを相互から分けるだろう」。「分ける」という動詞は、世の終わりに、天使たちが「良い魚」と「悪い魚」とを「より分ける」という「天の国のたとえ」(二三49)でも使われていた。終りの日は善と悪とがきっぱりと裁き分けられる日でもある。

■33節「羊を右に、山羊を左に」。羊は戸外で夜を過ごすことを好み、山羊は風の通らない場所に入れ、温かくする必要のある動物だとされる。また、当時の人々は「右」を幸いと結びつけ、「左」を不幸と結びつけていた。

■34節「天地創造の時から」。直訳「世の初めから」。この句に使われた「初め」は、「建物の基礎を置く」ことを意味する動詞からの派生語であり、「基礎・始まり」を意味する。▼「用意されている国」。直訳「準備されている国」。「準備されている」は完了分詞であり、これが確固とした約束であることを示している。世界の歴史は最初から救いを目的とする歴史(救済史)だったのである。「国」は「神の支配と、その支配が及ぶ領域」を表す言葉だから、「決定的な救い」とか「永遠の命」といったイメージと重なっている。

■35節「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ」。ここに列挙された行動は、ユダヤ教でも「愛の報い」とか「慈善の業」と呼ばれ、奨励されていた。社会の中での「小さい者」への視線を欠いた礼拝行為の無意味さは、預言者によって厳しく指摘されていた(アモ五21、イザ五八6)。

■41節「悪魔とその手下のために用意してある永遠の火」。直訳「悪魔と彼の使いたちに準備されている永遠の火」。「準備されている」は34節と同じ完了分詞。呪われた人には最初から永遠の火が準備されていたのではない。それは「悪魔とその使い」のための場所であった。

■44節「お世話しなかったでしようか」。直訳「私たちは仕えなかったのか」。食べさせ、飲ませ、着せるといった善い業をひつくるめて「仕える」と言われている。

①構成の解説

第一段落(31—33節)

マタイはイエスの講話を五箇所まとめているが、24章から始まる五番目の講話は、今週の福音で終わる。この講話の主題は終末にあるが、二四36からは、終末へと生きる教会の取るべき生き方に絞られてゆく。それは次のような構成から明らかである。

- ① 「人の子は思いがけない時に来る」 (二四36—44)
- ② 「忠実な僕と悪い僕のとえ」 (二四45—51)
- ③ 「十人のおとめのたとえ」 (二五1—13)
- ④ 「タラントンのたとえ」 (二五14—30)
- ⑤ 「人の子はすべての民を裁きに来る」 (二五31—46)

①と⑤では人の子の到来が述べられ、②—④では教会が取るべき不断の心構えが語られる。到来が遅いと考えて油断があつてはならず(②)、到来に備えて油を準備し(③)、信頼されて託されたタラントンを活用する(④)ことが、教会に求められている。

「人の子が栄光のうちに来る」とき、「すべての民が集められる」ことになるが、それは裁きのためである。

第二段落(34—40節)

王は右に立っている者には「あなたがたに準備されている国を受け継ぎなさい」と告げるが、その理由は「私が飢え、渴き、よそ者で、裸で、弱って、牢獄のうちにあった」とき、「あなたがたは与え、飲ませ、迎え入れ、包み、訪ね、私のもとに来た」ことにある。「いつ」そうしたのかと驚く彼らに、王は「私のそれらの最も小さな者たちの一人にあなたがたが行ったたびごとに、私にあなたがたは行った」と答える。

この段落では「あなたがた」の行為が肯定形で表されている。

第三段落(41—45節)

逆に左に立った者には、「悪魔に準備されている永遠の火の中へ行きなさい」と言い渡します。その理由は「私が飢え、渇き、よそ者で、裸で、弱って、牢獄のうちにあった」とき、「あなたがたは与えず、飲ませず、迎え入れず、包まず、訪れなかった」ことにある。「いつ」そうしたのかと驚く彼らに、王は「私のそれらの最も小さな者たちの一人にあなたがたが行わなかったたびごとに、私にあなたがたは行わなかった」と答える。

この段落では「あなたがた」の行為が否定形で表されている。

#### 第四段落 (46節)

第二段落では肯定形で、第三段落では否定形で表された「あなたがた」の行為が、一方を「永遠の命へ」と招き、他方を「永遠の罰へ」と向かわせる原因となる。この肯定と否定の対比によって、運命の岐路が強調される。

②マタイは二四14で「御国のこの福音はあらゆる民への証しとして、全世界に宣べ伝えられる。それから、終わりが来る」と述べています。今週の福音は、全世界の民に福音が宣べ伝えられた後に、人の子が到来して行う裁きをテーマとしている。すべての民が集められる日 (31—33節)

現実の生活の中で考えるとき、何が正しく、何が悪いのか、それが判然としないことがある。そのような場合には特に、自分の利益を中心に行動を考えることになりがちである。しかし、絶対的な正しさが明白にされる日を信じた者は、正邪の渾然とした現実にあっても、神の求める正しさがどこにあるのか、尋ね求め続けることができる。私たちが裁きの日を信じるのは、正しさを求め続ける勇気をえたいからである。

祝福された人たち (34—40節)

世の初めから用意されていた国を「受け継ぐ」ことになる人たちは、飢えたり、渇いていた人が人の子であるとは知らずに、行動を起こしている。彼らが行動を起こしたのは、最後の裁きを視野に入れていたからではなく、苦しんでいる者を目にしたとき、手を出さずにはいられなかったからである。救われたいという願いから行っただけではなく、純粹に同情したからであり、憐れみが彼らを行動へと駆り立てたのである。

永遠の命を獲得する手段として助けたのであれば、相手のための行動ではなく、自分のための行動にすぎない。それは隣人のいない隣人愛であり、神のいない神への愛になってしまふ。そのような行動は偽善でしかない。寄る辺のない「小さな者」を助けることは、どのような国でも教えられることだが、旧約聖書では、「小さな者」であった自分たちを導き出した神の救いの業に基づいた教えとなっている。苦しむ「小さな者」への配慮は、救いを当てにした投資なのではなく、すでに神によって与えられた救いが要求する行為なのである。

呪われた者ども (41—45節)

この段落の44節で、呪われた者が王に抗議するとき、「いつあなたを見て…あなたに仕えなかったのか」というように、「仕える」という動詞を使っている。ここでの「仕える」は、身分関係に基づく奉仕を意味するドウレウオー(「奴隷(ドワーロス)」からの派生語)ではなく、人格的な相互関係に基づく奉仕を表すデアーコネオーが使われている。人の子は確かに玉座にすわる王だが、「仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来た」(二〇28)方である。私たちが仕える者に変える力は、私たちに仕えた(デアーコネオ)キリストとの交わりである。この交わりを肝に命じておかなければ、仕えるつもりはあっても、仕えることなく終わってしまう。

今週の福音のまとめ

十字架を信じることによって、終末に向かって歩み始めた者が「小さな者」を気遣うのは、人の子の憐れみが心に染み込んでいるからだ。このような者は「小さな者」を自分の救いのために利用するようなことはない。

③注目すべき言葉——「人の子(ホ ヒュイオス トワー アンスローブー)

新約聖書には、メシアとしてのイエスに使われる名称がいくつもある。代表的な名称には「ダビデの子」、「神の子」、「キリスト」、「主」などがあるが、「人の子」もその一つである。

「人の子」という表現そのものは、旧約聖書に由来し、多くの場合は「人間」を表す(詩八5など)。だが、新約聖書との関連で重要なのは、ユダヤ教黙示文学の用法である。ダニエル書などに代表される黙示文学は、現在の世は悪の力が支配しており、神の意志が行われていないが、神はこれをまもなく終わらせ、義人に至福の生活を与える新しい世を実現させることを述べる。ダニエル書では、ダニエルが見た幻に、天の雲に乗った「人の子のような者」が登場する(ダニエル書13-14)。ここでの「人の子」は、地上を支配する異民族の王国を打ち破り、彼らに代わってとこしえの統治を行うイスラエルの代表者を指し(七17-18)、終わりの時に実現する神の支配を象徴的に表している。その後黙示文学が発展していくと、「人の子」はしだいに一個の存在として実体化されるようになり、世の終わりに天から現れて、審判者の役割を果たし、神の正義と平和を実現する人物と考えられるようになった。

新約聖書には「人の子」は約80回の用例があり、ほとんどは福音書に現れる。群衆が「その『人の子』とは誰ですか」とイエスに尋ねるヨハ二34や、ステファノが「天が開いて、人の子が神の右に立っているのが見える」と言う、使七56などを除けば、もっぱらイエスが語る言葉の中で使われる。イエス本人が実際に自分を「人の子」と呼んでいたかどうか、史実の問題としては大いに議論されている。しかし、イエスの弟子たちがダニエル書7章などの黙示文学が使うこの名称をイエスに当てはめ、そこからイエスへの理解を深めていったことは確かである。この名称が使われる文脈から、用法は次の三つに分類できる。

② 黙示文学的な用法で、「人の子」は世の終わりに天から来るメシア的な存在を表す。終わりの日には大きな苦難が人々を襲い、日が暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされるが、そのときに人々は「人の子」が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを見る(マコ一三26並行)。人の子は天使たちを遣わして選ばれた人々を呼び集める(二三27並行)。また、最高法院で尋問を受けるイエスは、「あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る」と述べる(一四6並行)。人の子は、父の栄光に輝いて聖なる天使たちと共に来る(八38並行)。人の子の到来は、東から西へひらめき渡る稲妻や(マタ二四27並行)、ノアの時代の大洪水にたとえられることもある(二四37-39並行)。今週の福音では、「人の子」は終わりの日に来て、栄光の座に着き、すべての国の民を裁く王として描かれている(31節)。

③ イエスの地上の働きに関係する用法。まず、「人の子」としてのイエスは、神から遣わされ、神的な権威を持つ者として行動する。「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう」と宣言するイエスが、「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」と中風の人に命じると、その通りになる(マコ二10以下)。安息日に麦穂を摘んだ弟子たちをフアリサイ派が非難すると、イエスは安息日が人の命のためにあり、人の子が安息日の主であると説く(二28)。また、人の子としてのイエスは、徴税人や罪人と交わったので非難を受ける(マタ一一19並行)。人の子には言い逆らう者がおり(二二32並行)、人の子のために迫害を受ける者もいる(ルカ六22)。きつねには穴が、空の鳥には巣があるが、人の子には枕する所がない(マタ八20並行)。

④ イエスの受難と復活に関係する用法。イエスは自分が多くの苦しみを受け、ユダヤ教の指導者たちに捨てられ、異邦人によって殺されるが、三日の後に復活することを弟子たちに予告し(マコ八31並行、九31並行、十33並行)、「人の子」としての自分が歩む道を明らかにする。ヨハネ福音書のイエスも、十字架と復活の出来事を通して神の栄光を現す「人の子」である(ヨハ三13・14、一一23・28、一三31・32)。人の子であるイエスの使命は、すべての人々を自分のもとに引き寄せ(一一32、十16、一一52も参照)、永遠の命を得させることにある(三15、一一24以下)。